〝棲神〟総目録（回顧）

〝棲神〟の歩みは本学園五十年の歴史である。いま往時を顧りみれば、当初は学友会誌的性格をもって同学同窓諸賢の研鑽或は随感を吐露する場として発足し、次第に日蓮教学・仏教学研究の純学術誌へと確実な歩みを進め、今時世界大戦前夜には、質量共に充実した機関誌として大いなる発展途上にあったのである。然るに、大戦の激化に伴なって各出版事業も縮小され、ついに昭和十八年をもって刊行中絶の止むなきに至った。まことに遺憾とするところである。

終戦後、本学に於ける学的活動が再開されるや、学園の内外から〝棲神〟を復刊せよとの声が高まったが、戦後の困難な経済状態のために、ついに八ケ年の歳月を見送り、昭和二十八年復刊第一号（通算第二十九号）を発刊し得たのである。同誌には前年本学で開催された第五回日蓮宗教学研究大会の紀要を掲載して、その復刊を飾ることができた。時恰も、学制改革に相遇し、本学園も新制の短期大学として発足した。これを機会に〝棲神〟の研究内容も戦前の仏教学・日蓮教学を主体とする研鑽の場を拡げ、人文科学・社会科学・自然科学の領域が新たに盛りこまれ、戦前のスタイルを全く一新して将来への雄飛がのぞまれているのである。

ここに〝棲神〟五十年の歳月を閲し、編集成果を総目録として掲載し往時を回顧することにした。しかし苦節五十年の春秋は、調査と蒐集に困難を生ぜしめ、一再ならず編集を放擲せんとしたが、それを克服し編集の遂行を最後まで支えたのは、資料蒐集に便宜を与えくだされた本学教授の林是幹先生・図書館司書猪俣日秀先生・竝びにこの総目録作成の発案者であった畏友上田本昌氏の暖い協力によるところである。ここに総目録として不備ながら成果を得ることが出来ました。特記して謝意を表する次第である。

昭和三十八年十月十八日

編集者　町田是正

1、目録は学術研究の論文を主体としたが、戦前のものは校友会誌的ニュアンスを生かすため、学芸・文芸・雑感の欄も編集者の取捨選択によって収録した。
2、全号数の蒐集に努力したが、創刊号・第三号・第十三号の欠号を出した。

創刊号（大正二年四月）―欠本―

第二号（大正三年四月十日発行）

慈悲の活用　暁星洞主
奥山の影より　帰山
人格中心の研究法　白風
救いのみこゑ　駄諫生
徴兵に出る友に与ふ　山内慧戒
淋しい身延　岡観孝
海　伊藤海聞
雨後の秋　黒籔学勇
布教の心懸け　友井能慈
吾人の目的　市川是温
我が国旗　辻能学
雪中の竹　望月宗康

第三号（大正四年四月）―欠本―

第四号（大正五年二月十八日発行）

宗躰決疑抄（承前）　中山祐師
石山寛師の本尊義―本尊論義の一節―　Y・S・N
聖語の文底秘沈に対する私見　上木竜慶
台当二家依経科釈の同異に就て像末両導師の立脚地を論ず　郭風生
無宗教者を如何にして導くべきか　黒籔学勇
宗祖折伏の第一義　溝田玄静
宗教と実生活　小林貞宜
折空観と体空観　太田純志
御会式に就て　藤田円海
行学之二道　猪口海静
佐渡御勘気鈔拝読後の感想　佐藤秀温
古りたる杉　今村野風

第五号（大正五年九月十五日発行）

宗躰決疑抄（承前）　中山祐師
教機時国抄大綱　泉義敬
聖祖の国家観　黒籔学勇
入妙の直路　在庵生
我　藤田鷲風
頼むべきは　松木秋月
如何にせば意義ある生活をなし得るか　望月本啓
吾人は奈何に生くべき歟　森亮遠
かたる花　猪口海静
聖祖の御伝記を拝読して　中村義明
報恩謝徳　渡辺泰深

我は本化の門下也　江原一夫
人生と労働　辻芦洲
本化妙宗の信行　赤島潮旭
飯井野御牧　吉田素恩

第六号（大正六年二月二十日発行）

宗躰決疑抄（承前）　中山祐師
観心本尊抄遠記　身延遠師
本尊論議変遷史論　吉田素恩
宗祖本仏論に対する瞥見　望月海伯
教機時国抄大綱（承前）　泉義敬
論妙法五字与三大秘法関係　藤田光肇
祖書中に顕れたる摂折二門義門分別　藤田恵暁述　小坂田竜教記

◇論　説◇

新年を迎えて　黒鍬学勇
宗門の前途　溝田在庵
高踏超然　樋口是端
聖祖の忠孝感　松木秋月
青年僧侶の自覚　菊池泰旭
自殺の可否　小川円如
日常生活と信仰の必要　川口智随
濁末の霊光　中村義明
新春のさけび　鈴木本周
身延に詣でて　古童庵

第七号（大正六年七月十五日発行）

宗躰決疑抄（承前）　中山祐師
第八識存在の証明　吉田素恩
本抄と十法界抄との交渉　泉義敬
寿量五百塵点に対する私見　望月本啓
論妙法五字与三大秘法関係（承前）　藤田光肇
観心本尊鈔発記　大野発師
最蓮房上人　溝田在庵
精　進　川口智随
論本宗之宗義竝相承　辻能学
本迹一致勝劣を論ずる所以　荒木経明
聖祖の御人格　猪口古童
身延山御書を拝して　北島精学
迷信を打破せよ　山間道人
宗祖の孝道　佐藤慈典

第八号（大正七年四月十五日発行）

観心本尊抄発記（承前）　大野発記
宗教の本義　中村凡愚
顕本論より見たる成仏　溝田在庵
天台四教義大要　藤岡柳風
論相承与付嘱関係　佐藤秀温

三秘論　山岡義哲
興師身延離山に付て　望月本啓
仏教に及べる上代印度の宗教思想　荒木経明
宗教と宗致との管見　中村義明
◇学　芸◇
真の生命　松木秋月
余の宗教観　川口智随
余の宗教観　辻能学
咄仏徒　結城瑞光
小さな愛国心から平和を望む人へ　猪口古童
日蓮主義と戦争　露月
宗祖の御生涯　鈴木順庵
吾は久遠の仏子なり　北島江楓
無題録　太田純志

第九号（大正八年三月十五日発行）
立法華肝要集　延山日叡上人
新時代の歓喜　藤田宮南
宗教の本義（承前）　中村凡愚
当家顕本論概要　菊池泰旭
鎌倉殿中問答考　藤田高肇
論相承与付嘱関係　佐藤秀温
三秘論（承前）　山岡義哲
興師身延離山考　太田純志
余の宗教観　小坂田正己
信仰と安心　辻能学
化他よりは自行を先に　堀内泰鑑
法華行者の折伏と迫害　鈴木順暁
先づ糧を与へよ　松木秀月
平和の巷

第十号（生誕七百年記念号・大正十年七月二十日発行）
立法華肝要集（承前）　延山日叡上人
仏教史上に於ける日蓮教義の特色　清水竜山
鎌倉殿中問答考（承前）　藤田光肇
日本仏教史より観たる日蓮上人　堀竜淳
成仏論祖判文証類集　藤田沼南
日蓮主義とは何ぞ　辻能学
◇学　芸◇
善日磨の使命　志村晧堂
奉迎七百年聖誕　結城瑞光
宗教的体験の価値　かなめ
聖き涙　秦観行
聖誕七百年に際して世人に訴ふ　高瀬教闡
自覚せよ青年僧侶　戸田峰仙
虹影の凝視　岡観修
過去より現在へ　江原亮勇
学問の軌範　高山専忍

第十一号（宗祖御入山六百五十年記念号　大正十二年二月十六日発行）

本尊の賛文年代に就て　鈴木文亮
日蓮聖人門葉文管見　太田純志
日蓮聖人の宗教と価値的批判　結城瑞光
信仰の寸心を改めよ　志村晧堂
念仏思想史に対する余の管見　福島瑞岳
魂の郷地を索めて　高田恵忍
能化と所化　深沢雪童
聖日蓮之奮闘　間宮観応
本化的文化生活　岡鳴月

◇学　芸◇

偶　感　小坂田竜教
抱かれむか本仏の懐に　二宮竜巌
平和の建設　堀内義光
慈悲に就て　吉川啓善
友の霊に手向くべき詩と文　江原白線
陸奥に咲ける百合花　佐藤海澄
自然と人生　富田海音
反省と努力　広瀬潮憲
寺院と酒に就て　秋永露翠
創作―浄　行　伊丹優曇華
創作―転　変　下田冷涙
不幸なる哲人の物語　高崎一二
魂の叫び　中林良陽

第十二号（大正十三年十月三日発行）

祖書感読随筆　台水日治
日蓮聖人門葉之管見（承前）　太田純志
念仏思想史に対する余の管見（承前）　福島瑞岳
立正安国論読後の所感　静　冥生
科学は果して宗教を葬むる手　富田海音
吾が崇拝せる大聖人　吉田曙人
支那回教徒の運命感　大峰竜正

◇学　芸◇

思い出の記　鳥海山人
人生の富　長瀬竜光
復　興　吉川啓善
伝説を語る漁夫　覚林道人
残　骸　寛明庵
御山の暁　渡辺智栄
偶　感　S K生
涙　深敬道人
お山の夕景　寒川生
培はれたる小百合　丸山其撰

第十三号（不明）―欠本―

第十四号（昭和三年十一月二十日発行）

日蓮聖人の見たる仏教史観　高田恵忍
吾祖と三階仏法　塩田義遜
仏子の進むべき大道　丸山嶺孝

宗教現象に対する一考察　近藤恵聡
真の宗教への道　矢野錬明
民衆の宗教化　方哲源
宗教的生命の深さ　竹多快照
本妙律師を慕いて　三木浄達
亜細亜の目ざめ　中屋教海
明るい世界へ　矢谷智秀
鮮支旅行記　方哲源

第十五号（昭和四年十二月十日発行）

信心銘　高田恵忍
商御器鈔の法門　塩田義遜
宗教に於ける超厭世的傾向　永倉唯嘉
仏説法滅尽経読後の感　松木本興
身延文庫蔵本・行学朝師奥書集　江利山義顕
原始仏教々団に於ける平等思想と其帰結　結城瑞光
生と哲学的精神　望月舜勝
重罪犯にて刊務所にある某真宗徒に送れる手紙　綱脇竜妙
日持上人の遺跡を訪ねて　望月是順
身延の実相　渡辺正教
筆と心　木村錬戒
現代社会の要求する人物　方哲源
虚空蔵菩薩と蓮長法師の祈願　武田快照
事の一念三千が如何にして信心義なりや　堀内義光
日精上人書簡類蒐集に就て　三木浄達

◇文　芸◇

友情　松田寿孝
思親閣より秋をたづねて　松井桓成
随感片片　矢谷清文
日記中より　柳井栄

第十六号（昭和六年二月十六日発行）

第一部　研究欄

本化題目宗創唱の仏教史的意義　高田恵忍
身延の御真蹟に就て　塩田義遜
我　永倉唯嘉
延文身庫蔵本　行学朝師奥書集二　江利山義顕
創作　恩讐のいづれか　綱脇竜妙

第二部　学生之部

成仏論　堀内義光
当家の下種論　武田海正
哲学的部門より観たる台・当両宗　黒崎政信
生活戦線と宗教問題　津田観貞
思ふままの記　樋口哲雄
微かなる者の信仰　大沢恵宏
本化建宗の根本精神に還れ　半沢経一

教育勅語煥発第四十周年記念を迎えて　柳井慈要
支那訳経史研究後之感　吉田錬正

第十七号（宗祖六百五十遠忌記念号　昭和六年十月十三日発行）

日蓮聖人と法華経　清水竜山
御遺文蒐集史上に於ける上古三聖　塩田義遜
縁陰幽草録（暑中休暇吟草）　高田恵忍
身延の声明　多紀道忍
身延文庫蔵本行学朝師奥書集三　江利山義顕
延獄墓碑私考　今村是竜
寿量本仏論　堀内義光
原始仏教に於ける三蔵の成立に就て　谷田享存

第十八号（昭和八年一月三十日発行）

棲神の法窟　遠藤是妙
宗祖所立の本尊は己身本尊也　渋谷文英
再び「御書新目録」の著者に就て　山川智応
身延文庫の録内外目録　塩田義遜
信　永倉唯嘉
嵩か森に就て　丸山嶺孝
青森県宗門史要　江利山義顕
唱題の妙行　松平とし子
日蓮宗の安心を読む　竜山
安国論綱要を読みて　高田恵忍
身延山布教の特殊性　結城瑞光
智識・道徳・宗教に関する断想　望月舜勝
戒思想に就て　灘上恵教

◇学　芸◇

竟妙庵目録小考　世古政順
機械から目的　矢谷玄智
久遠本仏と吾等衆生　福士泰量
恋愛と宗教とに於ける共通性を論ず　津田貞観
信念に生きよ　藤原是祥
現代宗教家の覚悟　馬場恵信
獅子王の如き心　加藤智学
矛盾より解決へ　E・Y生

◇随　筆◇

追　憶　静田中次郎堂
満洲事変の渦中より　よう
常闇を放れて　門田正孝
廃坑の后に立ちて　菊田雄寿
土牢を訪ふ

第十九号（昭和八年十二月廿日発行）

身延御入山の聖意に就て　清水竜山
開　会　関　遠藤是妙
観心本尊抄四十五字法体段正義　山川智応
身延山久遠寺門前町に就きて　平沼淑郎

仏教の行要としての三大秘法　塩田義遜
宗教の本質に就ての一考察　望月舜勝
即身成仏に就いて　灘上恵教
日蓮聖人の女性観　津田観貞
信と行と学に就いて　児島錬戒
臨師研究ノートより　中里是要

◇学　芸◇

近代の思想観　加藤智学
偶感　落井良昭
犠牲　田川義烈
仏徒は酒をのんでもよいか　竹多快昭
信仰物語—思母録　世古政順

第二十号（昭和九年十二月発行）

宗学の淵源　遠藤是妙
山川智応氏の「観心本尊鈔四十五字法体段正義の結論」を拝す　清水竜山
本宗の本尊観概説　半納
清澄寺草創考　塩田義遜
日持聖人本州渡海地考　江利山義顕
開目鈔・本尊鈔・報恩鈔の三鈔に顕はれたる本尊の研究　武田海正
末法時機相応の実践的宗教　中沢ようじ津
醒悟園開祖本妙日臨律師の研究　中里是要
偉人鳩摩羅什　吉田錬正
法華経の六万九千三八四に就て　柳井慈要
日蓮宗学新指針　室住一妙

◇文　芸◇

吟榻日乗　高田八朶
嚆藤田光肇君　松木静堂
盆と行事　田川恵良
厚徳寮々歌について　浅野たけし
誦経礼讃　宇佐美錬正
栖神居詠草　福島義孝

第二十一号（昭和十一年二月五日発行）

新発見の聖伝資料—身延文庫蔵古写本—題目の考察　遠藤是妙
観心本尊鈔と生死一大血脈鈔との対照鑽仰（山川智応氏の解説を拝す）　中谷良英稿　清水竜山補
本尊義旨帰　高田恵忍
妙法蓮華経字数考　塩田義遜
身延文庫余滴　江利山義顕
東陽房忠尋師と房舎に就ての考察　田中恵春
身延文庫に於ける不受不施係争の資料　斉藤要輪
宗教と芸術について　望月舜勝
性論雑考　今村是竜
仏陀最後の教誡　武田海正
己心問答　守屋宣雄

戒体即身成仏義に於ける聖祖の見地を論ず　三木浄達
本化の行法と戒壇論　中沢要実
日蓮聖人御系譜の研究　鈴木智好
◇文　芸◇
道余風韻（漢詩）　清水竜山
棲神居詠草（短歌）　福島義孝
鶯のこゑ（短歌）　渡辺信営
子に過ぎたる宝なし（随筆）　中村邦八
晩秋に題す（随筆）　斎藤順義

第二十二号（昭和十二年二月十三日発行）
祖廟中心　遠藤是妙
題目性乗弁　高田恵忍
大曼荼羅儀相の研究　塩田義遜
身延古抄雑々集に就ての考察　岡教邃
東陽房忠尋の著書に就て　田中恵春
御遺文にあらわれたる下種思想　武田海正
人生観断想　望月舜勝
身延御入山と南部実長　三木浄達
独居不三昧　中沢要実
日蓮聖人御系譜の研究　鈴木智好
◇文　芸◇
棲神居詠草　福島義孝
必要にして且つ充分なるもの　田辺正智
三ツ子の魂に与ふべきかは　加藤智学
宗祖霊跡伊豆と船守弥三郎　田中静光
闘　争　田村啓孝
正しく強き信仰をもつて　梅津栄希
能の究意　田中泰励

第二十三号（昭和十二年十二月十八日発行）
聖徳太子への一考察　柴田嶺孝
開会思想　遠藤是妙
清澄寺大衆考　塩田義遜
日蓮正宗小笠原慈聞師の「先づ本尊を定めよ」を読みて宗祖本仏論及神本仏迹論の非を糾す　中谷良英
純粋宗学の理念とその展開　清水竜山
御遺文にあらわれたる下種思想　室住一妙
内房尼についての一考察　武田海正
宗学への悩み　三木浄達
日蓮聖人御遠祖藤原共資公　中沢要実
◇学　芸◇
諫　暁　鈴木智久
結核克服に当りて　田辺正知
如何に生く可き乎　松井大周
時局と立正安国論（祖山学院雄弁大会賞）　宇佐美錬昌
浄土建設への歩み（祖山学院雄弁大会賞）　米村智浄
香川是光

第二十四号（昭和十三年十二月廿五日発行）

観心の法門　遠藤是妙
興門教義に対する一研究　清水竜山
立正観鈔に対する疑義に就て　山川智応
優陀那輝師の浄顕義浄評に就て　小林是恭
妙法寺記並に原本に就て　塩田義遜
本宗重要教判としての教観種脱相対　中谷良英
日蓮聖人遺文に於ける国神勧請義　望月歓厚
即身成仏研究序説　室住一妙
御遺文にあらはれたる下種思想　武田海正
対支布教と我徒の用意　結城瑞光
文学些言　斉藤要輪
文正治国論を拝読して　中沢要実
波木井書に於ける艮の方の管見　難波智竜
信仰と人間生活　証音寺恵進
レムブラントの創作に就ての瞑想　原隆二
◇法主即管長制度確立讃辞◇
祖廟中心制度の現在と将来　塩出孝潤
法国冥合の現証　柴田一能
給仕精神の高揚　堀竜淳

第二十五号（昭和十五年二月廿五日発行）

霊山浄土観　遠藤是妙
本門事観史　塩田義遜
日蓮教学中に交錯せる中古天台の思想及び様相　浅井要麟
予の安心立命　北尾日大
実践哲学としての一念三千　守屋貫教
哲学余滴（世界観人生観と哲学）　望月舜勝
宗学試案の中から　武田海正
純粋宗学本質論の資料と問題　室住一妙
祖書綱要の四種三段判に於ける底上相について　執行海秀
事相と事法門　中沢要実
外道の書　塚本竜晟
おもいつくまゝ　小崎竜雄
護法の理念とその展開　田中泰励

第二十六号（創立三十周年記念号　昭和十六年三月五日発行）

波木井公一族と身延山　塩田義遜
本仏実在を中心とせる統融的宗教　山川智応
新体制下における本質宗学よりの提題　室住一妙
本尊の本体について　武田海正
十如是事の研究　執行海秀
ヘーゲルの宗教哲学　里見泰穏

米国仏教の現状　青柳正法
蒙古の喇嘛教　丕日易来
給仕第一精神の検討　中沢要実

第二十七号（専門学校昇格記念号　昭和十七年三月十日発行）

治国利民皆由法華ノ事（心性遠師真筆談義書）　日遠上人
伝教の円頓戒に就て　塩田義遜
大信の発動　室住一妙
当家三益論略説　端是信
別頭教観論　田辺正知
事成院日寿師とその教学　山田英寿
根本二部対立考　望月海順

第二十八号（昭和十八年六月一日発行）

法華論の研究　塩田義遜
宗学とは何ぞ―絶対自覚の学として―　室住一妙
原始仏教に於ける善悪の意義　坂本幸男
日本道徳思想の性格　望月舜勝
仏教の自然観　里見泰穏
人生苦と宗教　中沢要実
異部宗輪論に表れた大衆部の仏身観　望月海順
梵唄に於ける五声音　石川是行
自我意識の宗教的展開　田中寛光
仏教の現代的意義　河村斌
爆進　須磨弁能

第二十九号（戦後復刊号・昭和二十八年九月十二日発行）

復刊の辞　松木本興
唱題思想の根底と其の帰結　塩田義遜
純粋宗学の綱領的展開　室住一妙
御消息文の分類研究　斉藤竜遵
同広中師について　秋山智孝
梵唄に口伝された五調子とその施法　石川是行
原子論と仏教　坂本幸男
有部に於ける存在の概念　里見泰穏
霊魂不滅の問題　波多野通敏
インフレーション心理　御園生桂三郎
◇第五回日蓮宗教学研究大会紀要（昭和二十七年十月二十四・二十五日）
諸法実相論　田村芳朗
日蓮法華宗の現代的旗幟　浦上芳武
教観双用法華経安心深敬讃講話　網脇竜妙
真言宗に於ける判教の綱格私見　脇本日禎
日蓮聖人書入本「註法華経」の版経について　兜木正亨
祈禱について―身延・中山の関係　影山堯雄
法華経成立史上に於ける見宝塔品の重要性　木村日紀

無作三身の根本批判と本仏の根本開顕　河合陟明
プトン「善逝史」に引用せられし法華経に就て　矢崎正見
宗学観に於ける個的立場と種的立場　茂田井教亨
本門戒壇の性格　長井弁順
竜華像師の布教ついて　高木豊
罪障消滅について　河村孝照
妙法華経に見られる文体上の特色　野村耀昌
教義と教学　芹沢寛哉
本門本尊の在り方一尊一士正意論　竹田日潤
現代における日蓮主義の進路　高木大幹
大般涅槃経の仏性論　勝呂昌一
勢至菩薩経に就いて　中村瑞隆
仏教実在観の現代的意義　長谷川正徳
給仕第一の精神　室住一妙

第三十号（昭和三十年十月十三日発行）

大曼陀羅儀相の再研究　塩田義遜
われらなにをなすべきか　室住一妙
法華取要抄の研究　上田本昌
祖山学院回顧録　林是幹
善を愛する者と神を愛する者（英文邦訳）　梅沢敬蔵
理科における分団学習について　伊藤茂俊
解放前夜に於ける中国農村の生活　町田是正
徽宗皇帝筆夏景山水図に就て　波多野通敏
教育の原理に関する仏教哲学の一任務㈠　疋田英肇

第三十一号（深見日円学長米寿記念号　昭和三十一年十月十日発行）

日蓮聖人の本尊（前篇）　塩田義遜
建設のための吟味―純粋宗学における問題学的領域―　室住一妙
本尊勧請形態の一考察　上田本昌
法華経に顕はれた時間　里見泰穏
華厳経と観法―特に三聖円融観について　坂本幸男
ある倫理学徒の反省　梅沢敬蔵
宗歌の曲譜について　秋山智孝
中国農村に於ける法意識の変革　町田是正
仏教哲学における教育の原理　疋田英肇

第三十二号（昭和三十三年三月八日発行）

日蓮聖人の本尊（後篇）　塩田義遜
宗門史上二三の問題について　影山堯雄
体系といふこと　室住一妙
日蓮聖人に於ける現生利益の問題　上田本昌
当於如来余深法中示教利喜について―法華経覚書―　望月淑夫
マックス・ウエーバーに於ける「資本主義の精神」の研究　町田是正
サイバネテックスについての一考察　佐藤正夫
◇第九回日蓮宗教学研究大会紀要（昭和三十一年十一月一日・二日）

日蓮大聖人御遺文に就て　岡田興隆
染浄二性に就て　熊王海潮
不受不施者の潜伏　宮崎英修
注法華経の注記年代について　山中喜八
歓喜の経典　斎藤竜遵
法華経の真髄は如来行である　水谷竜人
即身成仏実証としての如来行　有光友逸
本仏の主体性とカントの認識論との交渉　森川博祐
観音玄義の研究　若杉見竜
法華経宝塔品の成立地域　野村耀昌
小川泰堂居士に就て　小崎竜雄
三法通局と本化妙行　中谷良英
宗学における体系の問題　室住一妙

第三十三号（塩田義遜教授古稀記念号　昭和三十四年十二月八日発行）

祝塩田教授古稀　松木本興
塩田義遜先生略年譜
塩田義遜先生著述並執筆目録
法華経に於ける願と受持護与　塩田義遜
体系の展開　室住一妙
日蓮聖人と守護神信仰　上田本昌
山規制定の経過より見たる久遠寺の推移　林是幹
法華経の虚空について　望月海淑
三世について　里見泰穏
華北村落に於ける宗教意識に就て　町田是正
W・B・イエイツ小論　桐谷四郎

第三十四号（昭和三十六年三月三十一日発行）

対系的対決　室住一妙
日蓮聖人の政治批判について　上田本昌
天親・竜樹の内鑑冷然に就て　塩田義遜
原始分法華経における般若波羅密　望月海淑
中国史学の基礎―邦訳と研究入門―　町田是正
アメリカ文学に於けるピューリタニズム小論　大森孝

第三十五号（昭和三十六年二月二十五日発行）

法華経の本尊としての曼荼羅　塩田義遜
道徳的次元の問題について　室住一妙
開目抄鑽仰　㈠科段　室住一妙
デーヴアダツタの神通　長谷川義浩
華北農村の家族制について（前篇）　町田是正
アメリカ文学に於けるナチュラリズム形成とドライサーの位置　大森孝

第三十六号（祖山学院五十周年記念号　昭和三十七年十月五日発行）

日蓮聖人御帰倉より身延御入山まで　松木本興
日蓮聖人に於ける道徳的次元（後篇）　室住一妙

女人成仏―変成男子について―　望月海淑
日蓮聖人に於ける「願」の研究　上田本昌
法華経解釈に於ける吉蔵の法雲批判　里見泰穏
法華経に現れた神通　長谷川義浩
仏教保育の基本問題　秋山智孝
釈尊の敬虔に思う　猪俣康光
華北農村の家族制について（後篇）　町田是正
中国に於ける近代革命思想の発達と清朝の滅亡　堀一勇
ヘミングウエイに見る生と死なるもの　大森孝
祖山学院回顧録（特掛記事）　林是幹

第三十七号（本誌）

日蓮教団の教化伝道について　上田本昌
立正平和運動　室住一妙
法華経に於ける女人成仏　望月海淑
高等学校社会科「倫理・社会」に於ける日蓮聖人の取扱いについて　長谷川義浩
マックス・ウエーバーの社会科学方法論の一研究　町田是正
阿片戦争―その意義と特質について―　堀一勇
ヘミングウエイを中心とする「失われた世代」について　大森孝
開目抄鑽仰(二)写本対校並に正誤表　室住一妙

あとがき

ここに棲神五十年を回顧した。いま諸先賢により書き継がれてきた論稿を拝するとき、それは期せずしてその時々の日本仏教学界の或はわが教団内の、関心と様相を示す特異な編年史的史料をなしている。また復刊号以来、新たに登場した人文諸科学・自然諸科学にしても、すべて問題学的に取り上げられた諸労作である。「貧なれども想いは高く」。まこと棲神こそ泥中に開く蓮華一輪と誇りうるであろう。

この棲神が今後ますます価値高く、内容の充実と発展するために、読者各位の御鞭撻と御協力を切に願ってやみません。

（町田）